

●第 90 回日本生理学会大会を終えて

第 90 回大会長、横浜市立大学 石川 義弘

第 90 回日本生理学会大会は、平成 25 年 3 月 27 日から 3 日間にわたり、東京の船堀ホールにて開催されました。参加人数は 1800 人、演題数は 960、シンポジウム数は 65、教育プログラムは 13 講演という盛会に終わりました。大会最終日にもポスター会場は参加者であふれ、ポスターをめぐるのにも一苦勞でした。このように沢山の方々に熱心に参加していただけたのは、ひとえに諸先生方のご尽力によるものと深く感謝申し上げます。

日本生理学会は 1922 年に日本医学会の分科会として誕生し、東京で第一回の会合を持ったのが始まりです。以後年々発展を遂げ、本年度は 90 周年を迎えることができました。ちなみに日本医学会には現在 120 以上の分科会がありますが、その分科会にはそれぞれ会員番号がついています。生理学会は 3 番、つまり、日本にある 100 以上の医学系の学会の中でも、稀有の歴史を持つのが我が日本生理学会です。その点では、生理学会員は、もっと生理学会員であることに誇りを持って良いと改めて感じております。ちなみに会員番号 2 番はというと解剖学会です。生理学と解剖学は、医学の根幹をなす両学会ですから、不思議ではありません。生理学会と解剖学会が時として合同大会を開くのも、こういった背景があると思います。それでは会員番号 1 番はどこかかというと、これは実は日本医史学会です。かつては大きな学会でしたが、現在の状態を考えると、長い歴史があるということは、それだけ維持が難しいということでもあります。生理学会と解剖学会が、必死で努力を重ねているのは、このような背景があるからです。

第 90 回大会では、これまでの 90 年を振り返ると同時に、創立 100 年に向けて生理学会がどの方向に進むべきかを考えました。いわゆる 2020 年問題を始め、会員数の減少や、基礎医学教員枠のカット等、多くの難問を抱えております。このままで行けば、衰退の道を歩みかねません。そこで歴代の大会長や理事長、あるいは理事の先生方にご意見をいただきました。さらに日本だけでなく、アメリカの生理学会長や事務局長にもご意見をいただきました。その結果として痛感したのが、生理学会は変化していかななくてはならないということです。私はこの変化を、「進化」としてとらえ、さらにその進化が続いていかななくてはならないと感

じました。その結果が横浜大会のテーマである「進化し続ける生理学」となったわけです。ちなみに英文では、「Evolving Physiological Sciences」と複数になっていることにご注目ください。これは生理学の中にはたくさんの科学が含まれているんだということの強調です。ちなみに生理学教育もその一つであり、横浜大会から、生理学エデュケーション制度が開始された理由でもあります。

また今回の大会では、様々な新しい試みを取り入れました。手近なところでは、大会ホームページです。ウェブの専門家のデザインをお願いしました。さらに生理学会としては初めて、ツイッターとフェイスブックを入れました。運用を大学院生の若いアイデアに任せて、若い研究者の視点から大会を紹介していただきました。フェイスブックのクリック数も大会直前にかけて急上昇するなど、若い世代の活力を感じることができました。

特別講演では、福島原発事故調査委員会の委員長を務められた黒川清先生を始め、各界の指導的立場にある先生方にご講演をいただきました。海外からもアメリカ生理学会長のバレット先生をはじめ、元 JCI 編集長のマルクス先生（コロンビア大学生理学）から、アメリカ生理学会から日本生理学会への、様々なご助言をいただきました。また世界の生理学会とのつながりを意識して、世界数十カ国の生理学会会長からメッセージをいただきました。特別企画シンポジウムとして、宇宙飛行士の向井千秋先生らをお迎えしての宇宙医学シンポジウムでは、宇宙医学の発展と将来の展望を様々な観点からお話いただきました。宇宙から戻られた直後は名刺がとても重たかったという感想は、実際に宇宙生活の滞在者でないとわからないコメントだと思います。また佐川記念シンポジウムでは、日本の循環生理学研究に偉大な足跡を残された故佐川喜一先生を記念して、菅弘之先生（元国立循環器病センター研究所所長）をはじめ、佐川先生に直接指導を受けた先生方にご講演をお願いしました。また、これまでのポスター賞に「佐川喜一賞」の名前を使わせていただけることとなりました。さらに医学生を対象として、ひとりでも多くの未来の生理学会員が育ってくれば良いとの願いから、「若手研究賞」を設定しました。後継者を育てていくのも学会の重要な任務と考えます。

また生理学の教育を一層盛り立てるための「生理学エデュケーター制度」が発足して、多数の参加者を集めることができました。これは増えつつある生理学教育のニーズに対して、生理学会が教育の質の向上に貢献するために発足した教育者認定制度です。この制度が発展することにより、生理学における教育の重要性が再認識されるとともに、我が国の生理学教育水準がますます上がることが期待しております。生理学の主体は、研究と教育です。実はアメリカ生理学会でも30年前にこの事実気づき、生理学教育を学会の重要な業務と考えたことにより、生理学会をさらに発展させることができたといいました。

生理学会は次の100周年に向かって始動しました。90周年には世界の生理学会長からお祝いのメッセージをいただきましたが、100周年にはどんなメッセージになるでしょうか。途中にはFAOPSも我が国主催で控えております。我が日本生理学会が医学会屈指の伝統と歴史をさらに発展できるよう、諸先生方のさらなるご尽力をお願い申し上げます。来年の鹿児島大会で皆様方にお会いできるのを楽しみにしております。

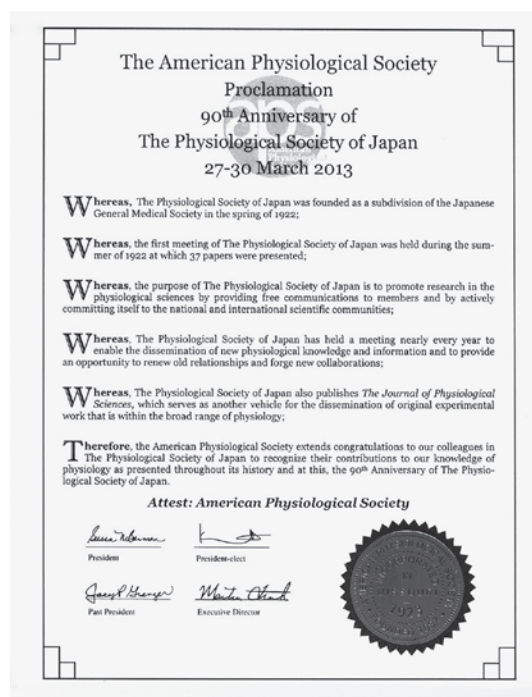


図1. アメリカ生理学会より寄贈された日本生理学会創立90周年の記念の盾

1922年に37演題で開始された日本生理学会はその後大いなる発展を遂げ、毎年の学術集会によって内容を新たにし、さらに学術雑誌である *Journal of Physiological Sciences* の発行により生理学の一層の発展に貢献し、これに敬意を表してアメリカ生理学会が楯を送るとあります。送り主には3代に亘るアメリカ生理学会会長および事務局長の名前が入っております。日米の生理学会の友好を記念する楯でもあります。

●第40回を迎えた自律神経生理研究会

自律神経生理研究会幹事：

産業医科大学・第1生理 上田 陽一

自治医科大学・神経脳生理 尾仲 達史

鹿児島大学大学院・統合分子生理学 桑木 共之

東京都健康長寿医療センター研究所・自律神経機能 堀田 晴美

自律神経生理研究会は今から約40年前の1972年に、同年新設された東京都老人総合研究所（現東京都健康長寿医療センター研究所）に赴任されて間もない若き自律神経生理学者であられた入来正躬先生と故佐藤昭夫先生、および海外留学中のお二人を日本に呼び戻された故内菌耕二先生（当時東京大学医学部教授）のご尽力で始まりました。

発足当時から現在まで、末梢の自律神経機能からその中枢性統合機構、そして、意識や覚醒水準などの制御を介した広い意味での恒常性維持神経機構までに関する *in vitro* からヒト非侵襲的測定までのあらゆる水準の研究成果に関する情報交換と討論の場として多くの研究者を輩出してきました。ネコやウサギでの麻酔下動物の血圧や交感神経活動記録、あるいは、ラット培養交感神経節からの記録などが中心であった時代にはじまり、遺伝子改変マウス、摘出脳幹標本などの *ex vivo* 標本、そして、オプトジェネティクスやウイルスによる局所発現制御を取り入れた無麻酔 *in vivo* 記録など、この研究会の歴史は、この40年の生理学研究手法の歴史でもあり、そこに、常に、生体の恒常性維持機構を最終的には丸ごとの生体で解明していこうというゴールを目指した研究の方向性が貫かれてきました。視床下部や脳幹の諸核、特に、室傍核や、吻側延髄腹外側核、孤束核、迷走神経背側運動核、縫線核あるいは青斑核などの神経核、そして、自律神経節、血圧・呼吸リズム、神経ペプチド、性ホルモン、痛みと体性感覚、内臓感覚、腸管神経系、体温制御などの機能を中心に、「自律神経」+「生理学」と「自律」+「神経生理学」の両方の立場から、生命維持にとって重要な生体機能のメカニズムを理解しようとする（大部分はその時点で未発表の）研究が報告されてきました。

その後、世話人を代々引き継ぎながら続けられ（表1）、2012年12月1日（土）に第40回を迎えました。当日は日本各地から約70名にのぼる研究

者が集い、活発な討論が行われました。40回目の節目として、歴史を振り返り、また未来を展望する、特別発表も行われました。下記に述べるように「記録に残さない」研究会ですが、特別な思いを受け継いだ歴代世話人の先生方が、40回分のプログラムを代々引き継いでくださったため、発表のタイトル集を記念誌（図1：「自律神経生理研究会40年間のあゆみ」）としてまとめることができました。ページをめくると、まさに時代の変遷を感じます。第一回目のプログラム（表2）を見ますと、日本生理学会の発展に多大な貢献をされた先生方のなつかしいお名前が並びます。

本研究会は、研究成果の発表というよりはディスカッションに重点を置いたユニークな情報交換の場であり、主に *in vivo* での研究を得意とする基礎生理学者の発表が多いという特徴は、設立当初から変わりません。時代の流れとともに、自律神経全般に関する基礎・臨床の研究者が集い、幅広い発表が行われています。プレリミナリーなデータを仮説とともに発表し、参加者の様々な視点からの意見や批判を受け、研究の方向性を再検討する場として、あえて「記録に残さない」研究会として継続しています。ベテランの研究者の発表のみならず、最近では若い研究者や大学院生の発表も増えており、あらゆる方面からの質問に自分の力で返答する討論能力を試す登竜門としての役割も持つに至っています。また、特別講演として新島旭先生、大村裕先生、小野武年先生などをお招きして研究の成果や考えをまとめて何う企画も続けられており、脈々と続く日本の自律神経生理学研究の歴史的連続性を維持する上でも大いに貢献しています。

第41回は、尾仲達史先生を世話人として、2013年12月7日（土）、日本光電本社研修センターで開催されます。参加・発表などご関心のある方は、tonaka@jichi.ac.jp までご連絡ください。

表 1. 歴代世話人

内 蘭 耕二 (1972 ~ 1980)
入 来 正躬 (1972 ~ 1992)
佐 藤 昭夫 (1972 ~ 1980)
福 原 武彦 (1990 ~ 1992)
板 東 武彦 (1993 ~ 1996)
小 山 省三 (1993 ~ 1997)
佐久間康夫 (1994 ~ 2001)
片 山 芳文 (1995 ~ 1999)
有 田 秀穂 (2000 ~ 2006)
彼 末 一之 (2002)
加 藤 総夫 (2003 ~ 2008)
黒澤美枝子 (2004 ~ 2007)
上 田 陽一 (2005 ~ 2010)
尾 伸 達史 (2009 ~)
桑 木 共之 (2011 ~)
堀 田 晴美 (2012 ~)

表 2. 第 1 回プログラム

●第 1 回 自律神経生理研究会
昭和 47 年 7 月 15 日 (土)
於 東京都老人総合研究所
世話人：内蘭耕二，入来正躬，佐藤昭夫
開会挨拶
内 蘭 耕二 (東大)
1. 交感神経節細胞のシナプス伝達
大 沢 一 爽 (都老人研)
2. 自律神経生理研究の方法について
瀬 瀬 教三 (久留米大)
3. ウサギ上頸交感神経節における伝達物質の作用
登 坂 恒夫 (東京医大)
4. 小腸壁内神経叢 (Auerbach's plexus 及び Meissner's plexus) の機能
横 山 正松 (福島医大)
5. 胃腸管運動の自律神経支配
中 山 沃 (岡山大)
6. 循環調節における自律神経の役割
入内島十郎 (東大)
7. 自律神経切断後の痛みについて
清 原 迪夫 (東大)
8. 血圧反射における交感神経系の反応と効果器の反応について
入 澤 宏 (広島大)
9. 交感神経系地域性反応について
入 来 正躬 (都老人研)
10. 自律神経中枢について
山 下 博 (神戸大)
11. レム睡眠期における循環反応
岩 村 吉晃 (東邦大)
12. 自律神経生理研究の問題点
新 島 旭 (新潟大)
13. 自律神経の遠心性衝撃よりみた膀胱反射
岡 田 博匡 (川崎医大)
14. 体性自律神経反射について
佐 藤 昭夫 (都老人研)
15. 心循環反応の中枢側よりのアプローチ
三 浦 光彦 (千葉大)
16. ガマ化学受容器の交感神経支配
石 井 公正 (福島医大)

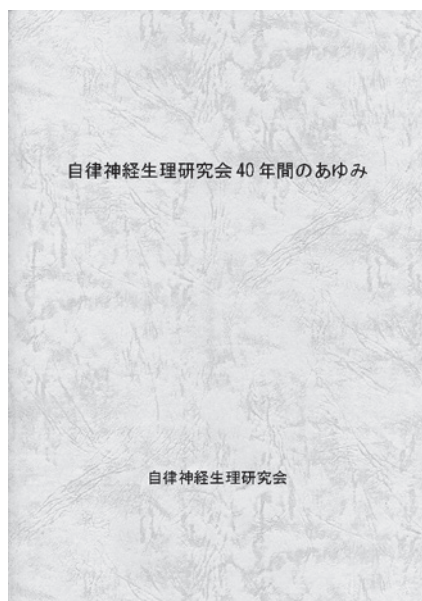


図 1. 「自律神経生理研究会 40 年間のあゆみ」(2012 年 11 月 30 日発行)の表紙

●平成 25 年度第 1 回選挙管理委員会報告

選挙管理委員会委員長 明間 立雄

「日本生理学会理事選挙規則」と「附則」が、理事会（平成 25 年 3 月 26 日）と総会（3 月 29 日）で承認されましたので、報告します。この規則に

則って、公平・公正な理事選挙を行いますので、ご協力をお願いします。

●利益相反委員会からのお知らせ

利益相反委員会委員長 蔵田 潔

今日の研究機関では産学連携研究が盛んに行われていますが、公的な存在である大学や研究機関、学術団体などが特定の企業の活動に深く関与することになり、その結果、教育、研究という学術機関、学術団体としての責任と、産学連携活動に伴い生じる個人が得る利益と衝突・相反する状態が生じ得ます。このような状態が「利益相反 (conflict of interest : COI)」と呼ばれています。利益相反マネージメントはすでに各研究機関で行われてい

ると思いますが、学会が主催する大会や機関誌を通じての成果発表においても利益相反の有無を明示することが社会から求められてきています。そのため日本生理学会では利益相反基本指針と運用指針を策定し、平成 25 年 3 月 26 日の理事会で承認された後、3 月 29 日の総会で承認されました。日本生理学会会員の皆様には是非ご一読いただきますようお願いいたします。

●研究倫理委員会からの報告

研究倫理委員会委員長 蔵田 潔

研究倫理委員会では平成 24 年度内に予定されていた動物の愛護に関する法律の改正に向けての動向を注視していました。特に、動物実験を行う研究機関の届出制、および実験動物を扱う業者の届出制の 2 点が法律改正にあたって検討されました。これらは動物実験の規制強化にあたるものであり、反対する意見書を日本生理学会として平成 23 年に提出していました。さまざまな経緯の後に、これらの規制案を盛り込まないことが決定され、平成 24 年 8 月 29 日に法案が可決成立しま

した。平成 25 年度の各研究機関におきましても、動物実験申請には大幅な変化はなかったものと思います。しかし、動物の愛護に関する法律の改正は 5 年ごとに行われる予定です。今後も学会として一般市民への動物実験への一層の理解を深めるような活動を継続していくことが必要です。広く社会に動物実験の理解を深めるため NPO 法人動物実験関係者連絡協議会が設立され、平成 25 年 3 月 9 日に第 1 回のシンポジウムが開催されました。日本生理学会はこのシンポジウムを後援しました。

●平成 25 年度第 1 回日本生理学会教育委員会議事録

日 時：平成 25 年 3 月 26 日 10 時 00 分～12 時 00 分

会 場：堀船タワーホール 2 階 松

出席者：石松 秀（久留米大），奥村 敏（鶴見大），奥村 哲（静岡理工科大），河合康明（鳥取大），久野みゆき（大阪市大），小泉 周（生理研），鯉淵典之（群馬大），椎橋実智男（埼玉医大），鈴木敦子（健康科学大），中島 昭（藤田保健衛生大），山下俊一（女子栄養大），山中章弘（生理研）（五十音順）

欠席者：松田哲也（玉川大），森田啓之（岐阜大）

議 長：鯉淵典之（委員長）

書 記：奥村 哲，山下俊一

【報告事項】

1. 前回議事録承認

平成 24 年度第 2 回教育委員会の議事録案が承認された。

2. 日本生理学会理事長・副理事長会議に関する報告

生理学エデュケーター制度に関して理事長・副理事長会議では承認が得られた。一方，将来計画委員会からは一部修正の要望が出ているため，認定委員会で検討中である（報告事項 3，討議事項 2）。

3. 将来計画委員会との打合せについて

生理学エデュケーター制度について議論があり，教育にふれる機会が少ない若手会員奨励という教育委員会の制度趣旨とは異なる意見（本制度を広めるためにはしかるべき人たちはすでに持っている状況を作り出す必要がある，現教員は申請すれば全員が取れる程度の条件にすべきである，等）を含め，様々な意見が提出された。

アウトリーチ活動の議論について報告があった。文科省へのアピールとしても重要であり，学会として推進する必要がある。一つの委員会で進めることは難しいので，タスクフォースを委員会の枠を越えて作り（討議事項 3），活動内容（例えば生理学のアウトリーチなのか，生理学会のアウトリーチなのか）を検討していくことになった。

4. 生理学会エデュケーター制度プレスリリースについて

生理学エデュケーター制度に関する広報活動について報告があった。文部科学省の記者クラブに FAX で連絡し，全国の関連大学にはちらしとポスターを発送

した。本制度が軌道に乗るまでは広報活動を続けていく。

5. Education について

日生誌の Education（教育のページ）の今後の執筆を，小泉周先生（高大連携とスーパーサイエンスハイスクール），奥村敏先生（歯学部で生理学教育），多久和典子先生（看護系の生理学教育）に依頼することとなった。

6. 会計報告

石松委員から会計報告があり承認された。

7. 新訂生理学実習書進捗状況報告

4 月中に第 2 稿となる予定である。

麻酔方法の記載については原則として各著者の記載を尊重するが，脚注にテクニカルノートの麻酔方法への参照を記載する。特にペントバルビタールやケタミンの使用について注意が必要である。

一部の実習項目が重複しているので整理が必要である。

各著者には著作権は生理学会にあること，印税は生理学会本体の収入となること，著者には原稿料を一回支払うことを再確認中である。

【討議事項】

1. 第 90 会生理学会大会の教育プログラムにおける各委員役割分担

石松委員提出の実施計画資料に基づいて進行と各委員の役割分担が確認された。

2. 生理学会エデュケーター制度の方向性について

上記報告のように，将来計画委員会では様々な議論

があった。そこで、下記のように、研究を中心に活躍する会員、教育を中心に活躍する会員のどちらにも受け入れられやすい制度とすることにした。

生理学エドゥケーター認定要件

1) 5年以内に15ポイント以上の受講ポイントを獲得していること

2) 会員であること

3) 評議員の推薦があること

4) 次の①～④のいずれか一つが該当すること

①日本生理学会での発表がある（本大会・地方会で筆頭・共著合わせて3回以上）

②生理学分野の論文がある（筆頭・共著合わせて1報以上）

③修士または博士の学位を有する

④認定試験に合格している（多肢選択問題による認定試験を申請書類提出後に実施、学会大会開催時に予定）

生理学エドゥケーター更新要件

1) 過去5年間で5ポイント以上の受講ポイントを獲得していること

2) 会員であること

3) 過去5年間で次の①～③のいずれか一つが該当すること

①日本生理学会での発表がある（本大会・地方会で筆頭・共同合わせて3回以上）

②生理学分野の論文がある（筆頭・共著合わせて1報以上）

③上記5ポイントに加え更に5ポイント以上の受講ポイントを獲得している

（海外留学・出産育児について：空白期間を考慮して更新時期の延長が可能）

経過措置による生理学エドゥケーター認定要件

1) 評議員であること

2) 生理学分野の論文があること（筆頭・共著合わせ

て、5報以上）

3) 日本生理学会での発表があること（本大会・地方会で筆頭・共同合わせて、5回以上）

4) 以下の①、②のいずれかを満たすこと

①年間10回以上の生理学関連分野の講義経験がある（常勤・非常勤を問わない）

②5名以上の大学院院生（修士・博士）指導歴がある

今回の変更にしたがい、今後のロードマップを作成し直す。規約については夏の理事会で承認を得て秋には学会員にアナウンスする。次回の社員総会で承認を得て実施することとなる。シニアの制度については今後の検討課題とする。

3. アウトリーチ・タスクフォース委員の推薦について

将来計画委員会での検討を受けて、タスクフォース委員として将来計画委員会からは前田正信委員、岸博子委員、上窪裕二委員、教育委員会からは鈴木敦子委員、編集広報委員会からは上田陽一委員の推薦が承認された。

4. 今後の教育委員会の活動について

教育委員会とエドゥケーター認定委員会の役割分担が課題となる。大会における教育プログラムについては両委員会で検討する。生理学エドゥケーター認定規約については次回の理事会にエドゥケーター認定委員長が出席して報告する。

エドゥケーター認定委員会は将来の実務増加にともない人数を増やさなければならないと考えられる。

生理学のコアカリキュラムについては現在進展がないが、エドゥケーター制度の改善にもつながることなので、是非日本生理学会独自のコアカリキュラムを作成する必要がある。

●平成25年度第1回日本生理学会学術研究委員会議事録

日 時：平成 25 年 3 月 26 日

場 所：タワーホール船堀

出席者：赤羽悟美（東邦大医），加藤総夫（慈恵医大），狩野方伸（東京大医），南沢 享（慈恵医大），宮田麻理子（東京女子医大），山下勝幸（奈良県立医大），柚崎通介（慶応大医）（五十音順）

欠席者：尾仲達史（自治医大），日比野浩（新潟大医）

議 長：加藤総夫（委員長）

書 記：赤羽悟美

配布資料：（1）理事会報告資料，（2）学術会議大型研究マスタープラン案，（3）科研費細目とキーワードに関する資料，（4）第 90 回大会委員会主催フォーラム・プログラム

【議 題】

1. 委員長あいさつおよび委員の自己紹介

2. 協議事項

1) 科研費細目・キーワードについて

細目・キーワード表が更新されたことについて報告があった（資料配布）。科研費制度に学会からの意見を反映させる一つの方法として、数年ごとに見直される細目・キーワードの設定への関与があり、今回の見直しに際しては久保前委員長を中心に本委員会で意見をまとめ理事長を通じて提言した。新しい細目表では、筋生理学は細目「生理学一般」に移り、同細目中にキーワード「筋肉生理学」が付け加えられた。また、総合生物学・神経科学に細目「神経生理学・神経科学一般」が設定された。複合領域（脳科学）は神経・筋生理学を含まなくなった。これらについて意見を交換した。

①生理学一般のキーワードが多岐にわたるが、ピアレビューに支障はないか？ ②神経科学、脳科学および環境生理学などで重複するキーワード（特に脳・神経関係）もあり、今後さらに統合整理していく必要があるのではないか？ ③生理科学分野の研究者にとって必要とされる細目・キーワードを把握するために、会員を対象として、科研費の細目・キーワードのどれを選ぶかについてのアンケートを行ってはどうか？ などの意見が出された。いずれも今後の検討に値する課題であることを確認した。

2) 科研費審査委員候補者データベースに対する学会としての関与について

日本学術振興会は独自の審査委員候補者データベースを作成し、この中から審査委員を選考しているが、この候補者に最近学会からの推薦を求めていることが報告された。自薦、他薦を募る、あるいは生理科学関連部局の新任の教授を推薦する、などの提案があった。今後、学振データベースの情報収集を行い、対応を検討することとした。

3) 学術会議マスタープランへの生理学会としての関与について

学術会議マスタープランについての説明に続き、機能医科学分科会と脳神経科学連合それぞれからの提案（資料配布）について報告があった。マスタープランは「研究者コミュニティの総意を反映する」ことを求めており、原則として生理学会は両提案を支持することを理事会および総会で確認したい旨、委員長から説明があった。今後の対応について意見を交換した。

3. 報告事項

第 90 回日本生理学会大会・学術研究委員会企画フォーラムについて

加藤委員長より、学術研究委員会企画フォーラム『日本の生理科学研究支援体制の未来に向けて』（3月29日（金）13：30—15：30，E 会場）についての説明があった（資料配布）。

●平成 24 年度日本生理学会入澤賞運営委員会報告

日 時：平成 25 年 2 月 21 日

会 場：国際医学情報センター内会議室

出席者：持田澄子（委員長），岡田泰伸，川上順子，小西真人，佐久間康夫（順不同）

資 料：平成 24 年度第 1 回日本生理学会入澤賞運営委員会 資料

協議事項

1. 入澤賞 2010 年度からの業務実績（賞金授与）の確認

平成 22-24 年度の授賞者を確認した（敬称略）。

平成 22 年度入澤宏・彩記念若手奨励賞イオンチャネル・トラスポーター分野受賞者：中条浩一（自然科学研究機構生理学研究所），藤原祐一郎（大阪大学）；平成 23 年度入澤宏・彩記念若手奨励賞イオンチャネル・トラスポーター分野受賞者：井上 華（東京医科大学），内田邦敏（自然科学研究機構生理学研究所）；平成 24 年度入澤宏・彩記念若手奨励賞イオンチャネル・トラスポーター分野受賞者：沼田朋大（京都大学），岩本真幸（福井大学）；平成 22 年度入澤宏・彩記念若手奨励賞心臓・循環分野受賞者：大内 仁（Rochester 大学），木場智史（鳥取大学）；平成 23 年度入澤宏・彩記念若手奨励賞心臓・循環分野受賞者：阿部 力（岐阜大学），照井貴子（慈恵会医科大学），簗部悦子（鹿児島大学），吉本美佐（国立循環器病センター研究所）；平成 24 年度入澤宏・彩記念若手奨励賞心臓・循環分野受賞者：金鳳柱（京都大学），加治屋勝子（山口大学），小金澤禎史（筑波大学）；平成 22 年度入澤宏・彩記念 JPS 優秀論文賞受賞論文：Voltage-gated Ca^{2+} channel mRNAs and T-type Ca^{2+} currents in rat gonadotropin-releasing hormone neurons: Nobuyuki Tanaka, Hiro-taka Ishii, Chengzhu Yin, Makiko Koyama, Yasuo Sakuma, Masakatsu Kato (Vol. 60 (3): 195-204, 2010), Centrally administered ghrelin potently inhibits water intake induced by angiotensin II and hypovolemia in rats: Hirofumi Hashimoto, Hiroki Otsubo, Hiroaki Fujihara, Hitoshi Suzuki, Toyoaki Ohbuchi, Toru Yokoyama, Yoshio Takei, Yoichi Ueta (Vol. 60 (1): 19-25, 2010)；平成 23 年度入澤宏・彩記念 JPS 優秀論文賞受賞論文：Involvement of brain ketone bodies and the noradrenergic pathway in diabetic hyperphagia in rats: Kinuyo Iwata, Mika Kinoshita, Shunji Yamada, Takuya Imamura, Yoshihisa Uenoyama, Hiroko Tsukamura, Kei-ichiro Maeda (Vol.

61 (2): 103-113, 2011), ATP hydrolysis-dependent asymmetry of the conformation of CFTR channel pore: Oleg V Krasilnikov, Rayshan Z Sabirov, Yasunobu Okada (Vol. 61 (4): 267-278, 2011)；平成 24 年度入澤宏・彩記念 JPS 優秀論文賞受賞論文：Tactile skin stimulation increases dopamine release in the nucleus accumbens in rats: Kimiko Maruyama, Rie Shimoju, Masato Ohkubo, Hitoshi Maruyama, Mieko Kurosawa (Vol. 62 (3): 259-266, 2012), Subepithelial trypsin induces enteric nerve-mediated anion secretion by activating proteinase-activated receptor 1 in the mouse cecum: Osamu Ikehara, Hisayoshi Hayashi, Toshiharu Waguri, Izumi Kaji, Shin-ichiro Karaki, Atsukazu Kuwahara, Yuichi Suzuki (Vol. 62 (3): 211-219, 2012), The effects of gonadal steroid manipulation on the expression of Kiss1 mRNA in rat arcuate nucleus during postnatal development: Ken Takumi, Norio Iijima, Kinuyo Iwata, Shimpei Higo, Hitoshi Ozawa (Vol. 62 (6): 453-460, 2012)；平成 22 年度入澤宏・彩記念 JPS 心臓・循環論文賞受賞論文：Open-loop dynamic and static characteristics of the carotid sinus baroreflex in rats with chronic heart failure after myocardial infarction: Toru Kawada, Meihua Li, Atsunori Kamiya, Shuji Shimizu, Kazunori Uemura, Hiromi Yamamoto, Masaru Sugimachi (Vol. 60 (4): 283-298, 2010)；平成 23 年度入澤宏・彩記念 JPS 心臓・循環論文賞受賞論文：The beginning of the calcium transient in rat embryonic heart: Takeshi Kobayashi, Sachiko Maeda, Nobutoshi Ichise, Tatsuya Sato, Takehito Iwase, Sumihiko Seki, Yoichi Yamada, Noritsugu Tohse (Vol. 61 (2): 141-149, 2011)；平成 24 年度入澤宏・彩記念 JPS 心臓・循環論文賞受賞論文：Evaluation of left ventricular mechanical work and energetics of normal hearts in SERCA2a transgenic rats : Guo-Xing Zhang, Koji Obata, Daisuke Takeshita, Shinichi Mitsuyama, Tamiji Nakashima, Akio Kikuta, Masumi Hirabayashi, Koichi Tomita,

Roland Vetter, Wolfgang H. Dillmann, Miyako Takaki (Vol. 62 (3) : 221-231, 2012) ; 平成 22 年度入澤彩記念女性生理学者奨励賞受賞者 : 水村和枝 (名古屋大学) ; 平成 23 年度入澤彩記念女性生理学者奨励賞受賞者 : 西谷 (中村) 友重 (国立循環器病研究センター) ; 平成 24 年度入澤彩記念女性生理学者奨励賞受賞者 : 佐々木真理 (愛媛大学・医学系研究科・分子病態医学分野).

2. 入澤賞 2010 年度からの業務実績 (運営費の使用実績) の確認

平成 23 年度と平成 24 年度の入澤基金増減を確認した.

3. 3 年間の見直しと今後の方針

1) 入澤宏・彩基金運営規定, 入澤宏・彩記念若手研究奨励賞規定を見直し, 現状にあったものに一部改訂することを検討した.

2) 入澤宏・彩記念若手研究奨励賞選考細則に記されている「使途報告書」や, 賞金授与に関する書類について検討した.

3) 「生理学女性研究者の会 (Women in Physiology of Japan, WPJ)」に委託されている入澤彩記念女性生理学者奨励賞の募集基準について検討し, WPJ に提言を行うことを決定した.

● 2013 年第 1 回日本生理学会編集・広報委員会議事録

日 時：2013 年 3 月 26 日 於 タワーホール船堀

出席者：多久和典子（委員長），上田陽一，宇賀貴紀，奥谷文乃，尾野恭一，奥村 哲，久野みゆき，小泉 周，小林 誠，相馬義郎，田代倫子，村山 尚（書記），毛利 聡，山下俊一，渡辺 賢（副委員長）（五十音順）

議題

1. 報告事項

（1）EBSCO：74 巻 5 号まで提供を完了した。

（2）今回の総会で承認される下記事項に関し，決定後は速やかにホームページにアップロードすることが確認された：特別会員，利益相反，決算・予算案，一般社団法人化に伴う定款の改訂，各種委員会報告等

（3）日生誌の PDF ファイルのホームページ（HP）アップロードの障害は，新たなサーバーを用意することにより解決した。

2. 審議事項

（1）日生誌について

① Symposia の掲載方法・原稿依頼の方法について，2013 年の Symposia 担当者である渡辺副委員長より以下の提案があった。「2012 年度より Symposia の掲載が始まり日生誌の内容が充実したものになった。その反面，ページ数増加による印刷・郵送費用の上昇から赤字化が懸念される。Symposia の一部または全部を WEB 掲載とした場合の経費削減の程度を杏林舎に見積もってもらったところ，(i) オーガナイザーのまとめを印刷し，各シンポジストの原稿は WEB 掲載のみとする場合で約 80 万円，(ii) Symposia 原稿全てを WEB 掲載のみとする場合で約 150 万円の経費削減が可能となることがわかった。(ii) 案では削減額は大きい Symposia の広報が十分されない懸念があり，(i) 案でも十分な経費削減が期待されるので，(i) 案を提案したいので審議をお願いしたい。」審議の結果，現在の厳しい予算状況では一部 WEB 化も止むなしということで，全員一致で (i) 案を採択した。Symposia 掲載は 75 巻 4 号から 76 巻 2 号まで均等に掲載予定とし，76 巻 3 号を予備とする。併せて，日生誌発行に合わせて WEB ページのリンク先 URL を学会の一斉送信メールで会員に周知すること，来年度の生理学会大会では，シンポジウム募集の段階で Symposia 掲載の詳細・原

稿締め切り等についてアナウンスを行い，周知することが確認された。

② Symposia 以外の論種の校正担当者，分担は 2013 年も現行通りとする。

③ 校正の方法として，2012 年より PDF での校正，メールによる連絡を試行したところ，特に支障がない様であり継続することとなった。

④ VISION, OPINION の執筆者が少ないので年齢を問わず執筆候補者の勧誘に努める。

⑤ 「若手の広場」のコーナーが 2012 年から新設された。さらに拡充をはかるため，Afternoon Tea のような持ち回り形式も視野に入れ，引き続き検討を行う。

⑥ 日生誌 PDF ファイルの HP アップロード，EBSCO サイトへのファイル提供業務は，それぞれ相馬委員，多久和委員長が行っている。今後後継者育成とサステイナビリティの観点から複数の担当者にすることを検討する。

（2）HP について

HP 更新について，多久和委員長より以下の説明があった。「現在の HP は開設から 10 年以上経過し，その間普及してきた既製のソフトウェアと互換性がなくなり，日生誌 PDF ファイルアップロードの不具合やデザイン更新の障害が顕在化してきている。そこで 2012 年中からリニューアルを検討し，ホームページに公募を掲載したところ，現在までに 2 社から提案があった。」提案されたデザイン・仕様書等を参照し活発な議論の結果，1 社は見積が高額であり採用出来ないことがわかった。もう 1 社の見積提出を待つとともに，HP にて再度公募を行うこととなった。再公募の文面には，年間管理費の目安を明示するとともに，既存の Contents Managing System を採用した安価で効率的なリニューアル達成をめざすこと，Facebook, Twitter などの SNS を積極的に活用することなどを盛り込むことになり，山下委員が公募の文面を作成し，メール会議で確認後 HP にアップロードすることとなった。